

巻頭特集

松本で世界各国の文化と触れ合おう

Feature Article

「国際交流」という言葉からどんなイメージを受けるでしょうか。もしかしたら堅苦しいもの、と思われるかもしれません。でも実際に体験してみると、思いもよらない新たな発見ができたり、視野が広がったりと人生に彩りを加えてくれるものです。そんな国際交流を松本にいながらにして感じられる年に1回の催しがあります。「こいこい松本」。今年で第8回を数える国際色豊かなイベントの実行委員会のメンバーに、原動力となっている思いを聞きました。



オープンマインドな観光都市・松本
在留外国人数は「県内ナンバールワン」

アンデスの山々に響き渡るケーナの音色、アフリカの大地に力強く鼓動するジャンベのリズム。「こいこい松本」の日は例年、松本市中央公民館Mウイングが世界各地の文化を伝える「ミニ万博」のような装いに様変わりします。

今回の開催日は6月18日。実行委員会のメンバーが会議室に集まり、間近に迫った本番に向けて予定を詰めているところです。

松本在住の海外出身者や学生、社会人など多彩な顔ぶれを束ねる実行委員長は、佐藤友則さん(信大グローバル教育推進センター教授。故郷の仙台をはじめ韓国、松本で外国人留学生を対象とした日本語教育に25年間携わってきました。

そんな佐藤さんが「こいこい」を発案したのは、長年の経験からある思いを抱えていたからです。

「日本人と外国人が交流する機会が非常に少なく、それぞれが狭いコミュニティの中にいるんです。それに、松本は県内で在留外国人の数がナンバーワン。それなのに交流の場がないんだらうと。そこで自らが理事長を務めるNPO法人「中信多文化共生ネットワーク(CTN)」と有志に声をかけ、2010年に第1回の開催にこぎ着けました。

そのうち、徐々に仲間の輪が広がっていききました。信大の学生や留学生、地元高校の生徒、一般の有志。中には外国出身の人も少なくありません。

その中の1人、柳沢ワシランさんはタイ北部チェンマイ出身の女性です。日本へ海外旅行で訪れて気に入って、松本市の男性と結婚。来日13年目で、初期からこのイベントに積極的に関わっています。

「私は皆さんのおかげで日本語がペラペラだけど、皆さんはタイのことを「微笑みの国」くらいのイメージであまり知らないと思うんです。でも調べれば調べるほど日本とタイは仲が良いし、タイは本当に良い国。オープンな松本の街の皆さんにもっと知ってもらいたいと思っています」と熱く語ってくれました。

ちなみに、昨今のバクチーブームは「うれしい」とのことです。

「外国人は怖い」負のイメージ払拭へ
いざ触れ合えば「目から鱗」の発見も

もう一つ、佐藤さんにはこの祭りに込めた強い思いがあります。「外国人」という「怖い」と思われる方も少なくないと思うんです。でも実際はそうじゃない。この祭りを通じてそういったイメージを払拭して、「こんなにたくさんいるけど怖くないし、文化は違うけど同じ人間なんだ」と感じてもらいたいですね。

実際に海外の方々と触れ合うと、どんなことが得られるのでしょうか。そう問うと、「目から鱗が落ちることがたくさんあります。日本人の間だけで当たり前前の価値観が全く違うし、彼らは本当に自由で豊かな発想を持ってたくましく日本で生きていますよと話してくれました。

アメリカのトランプ政権誕生が象徴するように、いま世界では「自国第一主義」を求める声が高まっています。でも、佐藤さんは「短期的に経済の視点からすると自国第一でプラスになるかもしれないが、長期的なスパンで見るとグローバル化は止められないと思います」とも。

欧州では自国第一主義は否定されましたし、異文化との触れ合いが新しい発見をもたらしてくれるのは間違いなさそうです。

第8回の今回は、各国の文化を紹介することにエネルギーを注ぐといます。英語圏、韓国、欧州、モンゴル、東南アジア1、東南アジア2、南アジア、中国の8部屋で各国の魅力を紹介するほか、例年通り民族衣装のファッションショーや演奏、ダンスなどステージも多彩。各国の部屋を回る好評のスタンプラリーもあります。

入場無料のイベントで気軽に異文化交流。わざわざ空港の国際線ターミナルから旅立たずとも、すぐそこに世界を広げられる機会があります。「こいこい」という誘いの声に乗り、行って、見て、感じてはいかがでしょうか。

第7回「こいこい松本」イベントの様子
Scenes in 7th "Koi Koi Matsumoto"



イベントを盛り上げるための会議をする代表の佐藤友則さん